
東方涙梅雨

化け灯籠？

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方涙梅雨

【Nコード】

N6510M

【作者名】

化け灯籠？

【あらすじ】

——突然梅雨が明けましたね——

——それは、梅雨が幻想入りしたからです——

梅雨明けの日本列島。幻想郷はいまだ明けぬ梅雨の中にあつた。それも普通の梅雨ではない。昼夜を問わず雨が降り続き、農作物を腐らせるほどの梅雨。

そんな事態に危機を覚えた二人の神様と一人の農民が、幻想郷を救わんと立ち上がった……のか？

雨に対する立場の違い。使うものと使われるもの。個々が様々な

思惑を持ち交錯する。

秋姉妹＋オリキャラ1名の織り成す異変解決記。詳しい登場キャラはタグを。タグがついているけど未登場のキャラは推敲前の下書き状態です。

基本不定期ですが、なるべく週1更新以上を目指していきます

生贄の少女（前書き）

> i 9 3 8 3 | 9 1 3 <

生贄の少女

東方涙梅雨

「今日も雨……もう、いい加減やんなっちゃうわね」

7月のはじめのことだった。幻想郷では、5月末の入梅からというもの、一度たりとも雨が止んだことがなかった。昼も、夜も、ずっと。

「外の世界から、とうとう梅雨が幻想入りしちゃったのかしらね……」

呟くのは、博霊神社の巫女。博霊霊夢であつた。博霊大結界の守護と、この幻想郷内の異変の解決が主な役割である。信仰は薄くないはずなのだが、いかんせん立地条件がよくない。幻想郷の果て。それだけがために参拝者は決して多くはない。故に彼女は常に貧困に喘いでいるわけだ。

「もう、おなかは減つたし、外は雨だし……こういう日は引きこもつて眠るのが一番ね。エネルギー消費を抑えよう」

霊夢はそういつて布団の中にもぐりこむ。確かに今はまだ七月の頭、梅雨が少しばかり伸びていてもおかしくはない。故に、彼女はこれを異変であるとは認識しなかった。

実際のところ、梅雨なのだから、雨が多くなるのは当たり前であろう。故に雨の回数を数えて、毎日雨が続けているからどうかとか、そう考えはしなかったのだ。どこかで適当に晴れたような、そんな風に記憶が書き換えられてしまうのもあるかもしれない。

だが、こうも雨が続くとどうしても困る者達がいた。

「雨乞いの儀式というのはあるが……晴れ乞いというのは聞かないぞ」

昼間でも薄暗い部屋の中。障子を透く薄い光の中で、なにやら男たちが話し合っていた。

「晴れ乞いの儀式というのも確かにあるのだが……。しかしそれをやって、夏場に雨が降らなくなったらどうする」

「そしたらまた雨乞いをすればいい」

「そんな自分勝手な……」

男たちは、どうやら農民であるらしい。部屋の中には様々な農具が打ち捨てられたかのように転がっていた。それもそうだ。ここ一ヶ月以上、太陽が出ていないのである。することといえば、せいぜい土壌を流されないように固定を行うこと。

もつとも、それも無駄となってしまうたようではあるが。

「博霊の巫女はどうだ……彼女ならきつとどうにかしてくれる」

ある者が言った。しかしその提案は早々に否定されることとなる。

「だめだ。今はあの巫女に払うべき礼もない……。それに、あの巫女が絡むとだいたい殴って終わりだろう。それで来年さらにひどい目を見たらどうする……」

「しかし、稲も全部だめになってしまったわけで……このまま放って置いたら俺たちは全員餓死してしまう……」

「礼は必ずするから、と言ってどうにかしてもらえないだろうか……」

……

「無理だろう」

「それに、今から晴れたところで何が作れるかというのも問題だ」

「いや、馬鈴薯ジャガイモならまだこれからが蒔き時だ」

「だとしたら……今月末が限界だな」

「転作するにも、晴れてくれないとどうしていいか分からないだろう」

様々な意見が飛び交い、そして結局皆口を閉じ押し黙ってしまった。

日照不足。それは農業を営むものにとってはそれほどまでに致命的な障害であった。

そう、まさに致命的なのだ。

幻想郷の冬は厳しい。外に出て狩を行おうにも、吹雪と寒さに阻まれ運が無ければ死んでしまう。故に人々は冬までに溜め込んだ食料をつかって生き延びるしかないのだ。大きな里ならともかく、里から少し離れたこの農業集落では里への輸出がために貯蔵はそこまですくない。故にこのままでは冬を越せないのである。

そもそも、貯蔵をそこまで多く行う必要が無かったはずなのである。しかし今年は、稲が全滅、収穫がゼロなのだ。全員餓死とまではいかないが、次の冬で女、子供、体力の無いものから順番に脱落者が現れるのは明らかだ。

「やはり、神様に生贄を捧げてどうにかするのが一番では……」

少女は家の誇りであった。家の誇りは、少女の誇りであった。病弱だった自分が、村の皆のために役立てるのだと。少なくとも「生贄」というその言葉の意味を知りつつも、それを実感しないうちはまだそう思っていた。

まず目に付くのは腰まで伸びた桃色の髪の毛。そして紅玉のように真っ赤な瞳。その顔立ちを決して悪くなく、といって秀でて美しいというわけでもない。どちらかといえば、かわいいかな程度の少女。

丸襟のシャツの上に羽織ったベストは栗色。太ももを隠すか隠さないかの短めのスカートには、紅葉をあしらった模様が織られていた。どちらも秋を意味するもの、これから贄となるものの証だった。

「すまない……アカリ。お前には本当に悪いと思っている」

アカリと呼ばれた少女は無言でうなづいた。声をかけた男は、親か、それとも村長か。彼はそれ以上言葉を発せず、少女の白く美しい手をとった。

そして、その両手を後ろに回し麻でできた縄で巻く。何回も、何回も入念に。そしていよいよ結び目が結われる。

「ひっ……」

アカリは小さく悲鳴を上げた。誇りであるとは分かっている、このままでは次の冬に自分が死ぬであろうことが分かっている。彼女の中の何かがそれを拒んだ。

縄を結う男は、聞こえたのであろうが……決して何も聞こえなかったかのように次の縄を手に取り少女のほっそりとした足に結わいつけた。

そしてその足に結わいつけられた縄の反対側が、決して動ぜぬ神木へ。

「……すまない」

かける言葉が見つからなかったか、男はそれ以上何も言わず少女に背を向けた。そして数歩歩いて一度少女を振り返り、そしてあとは駆けていった。

この、功利主義的な行為に対する罪悪感、というものもある。自分たちが助かりたいがために、罪のない、儚い少女を生贄にささげるのだから。たとえそれが次の冬で出るであろう脱落者の一人であれど、本来なら守れて然るべきものなのだ。

「私は村のために死ぬんだから、怖くなんてない」

降りしきる雨の中、少女は一人呟いた。自分を納得させるために。

呟きに、返事をするものはなかった。背後で、川が流れている。その音だけが空間を満たしていた。

「私が死ねば、村の人たちが冬の間飢えなくて済むんだ……」

やはり答えるものはなかった。しかし、彼女の心の中で、その言葉に対する何かがふと浮かび上がってきた。頭を振ってそれを振り払

おうとしたが、どうやらそれは無駄だったようで、その思いはそのまま口から零れ落ちた。

「私も、みんなと一緒に冬を越したかったなあ……」

川の音が聞こえる。雨で増水した川のどうどくと流れる音が。これがかきつと、自分の聞く最後の音になるな、と彼女は思った。そう思うほどに、自身のおかれた状況の理不尽さに対する想いは募った。

「どうして、私なんだろう」

その疑問が、今までの覚悟に水を差すこととなった。体が弱い子ならば、ほかにもいた筈なのだ。とすれば、やはり家の立場なのだろうか。それとも、ただ単に運がなかったからだろうか。

そう考えるうちに、彼女はひとつの結論に至った。

「ああ、私は生きていたかったんだね」

悔しさか、悲しさか。少女のルビーのように澄み渡った瞳から、一条の涙が零れ落ちた。

今からでも、逃げ出したいと思った。しかし、手も、足もきつく縛り付けられて身動きが取れない。

「そうね、生きていたいんでしょう？」

突然、耳元で聞こえた声にアカリはびくつと肩をすくめた。

「ああ、心配しないで、私は妖怪だけど他人に捧げられた生贄をとって食べちゃうほど飢えてはいないわ」

まるでアカリの心中を察したかのように、その声は言った。どうやら神木の後ろから話しかけてきているようで、その姿は確認が取れない。

「あなたは……」

食べない、とは言われたが、体の震えが止まらない。その妖怪の発する、異様なまでの威圧感のせいだろうか。

「私？ そうね、私は幻想郷のすべてを見届ける妖怪」

その声は、後ろからも前から聞こえたような気がした。と、そう思った瞬間、アカリの目の前の空間が裂けた。

空間が、裂けたのである。空間は物ではないのだから、裂けるはずがない。だが、アカリの目の前でそれは裂けたのだ。そしてその裂け目の中から、白い手袋に包まれた手がまず出、そしてそれに次いで一人の少女が姿を現した。背中まである長い髪。そして陰陽をあしらった紫と白の服。頭にかぶった帽子は、里ではあまり見かけない形状のものでなんと形容がつかなかった。

「まあ、今回の件は私が動いてもよかったんだけど」

少女は手に持っていた傘をさし、そしてアカリに傾けてやった。

「少しばかり見てみたくなったの。あの二人の神がどう動くか。いえ、幻想郷の住人がどう動くかも」

金髪の少女はそういつてクスッと嗤った。可憐な少女の笑みではあったが、しかしその様子はどこことなく、将棋を指す棋士を思い起こさせた。

「……あ、傘、ありがとうございます」

アカリはとりあえず傾げてくれた傘に対して礼を言った。少女は、いいえ、と笑顔で答える。

「あ、あの……お姉さん」

勇気を振り絞って、声を出す。いや、もうどうせ死ぬのだから本当は何も恐れる必要などないのだろう。しかし、あの少女にもし無礼を働けば死よりも恐ろしい目に遭わされそうだと、そうも思った。

「きゃ、お姉さんですって……もう、お世辞なんていいのよ！」

少女は嬉しそうに言った。そして付け加える。

「本当は一万歳……そっからさきは数えてないけど。そうよ、心は永遠の17歳」

それで、なあに？ と彼女は笑顔で聞いた。

「……生きたいです」

アカリはそれだけ言った。

「そうよね、それはそう。ならばここでこのまま待っていれば間違いないわ。後は貴女次第だけだね」

少女はそういつてアカリに背を向けた。

また、また一人になつてしまふ！ アカリは反射的にそう思った。
「待つてくださ……」

「もちろん、見捨てたわけじゃないわよ。貴女は大切な駒だもの。私がそう簡単に駒を手放したりはしないわ」

少女は振り返りそして笑った。

「ただ、そうね……これから起こることのネタバレが嫌いなだけよ」
ネタバレ。その言葉の意味をアカリは一瞬考えた。つまり、彼女はこの先起こるであろう事を知っているということか。そもそも彼女が仕組んだことなのか。どちらにしろ、彼女には巨大な将棋版が見えているようであつた。

「私の名前は、八雲 紫。もし自分の力でどうにもならなくなつたら、「たすけてゆかりおねーさん！」って叫びなさい。たぶん助けてあげるから」

紫はそういつてまた身を翻した。桃色の傘が背を向ける。そして、呼び止める間もなく姿を消してしまつた。

かくして、アカリはまた一人になつてしまつた。しかし、今度は妙な安心感があつた。先ほどの妖怪は、あの威風から察するに幻想郷最強の妖怪……その、最強の妖怪が助力をしてくれるというのだから。

同時に、緊張から解き放たれたためか全身から力が抜けてその場にへたり込んでしまつた。足が木に縛られているため、彼女はバランスを崩して前のめりに倒れこむこととなつた。そして当然ながらそのまま、立ち上がることができなくなる。

「つつ……しまつた」

しかしどうもがいても手が縛られているのではどうしようもない。結局アカリはしばらく動いてみた後、結局起き上がるのを諦めた。

と、また何者かがやってきたか、茂みがさがさと蠢いた。ついに、私が生贄に捧げられる神様とやらが現れたかと、アカリは身を堅くした。

「どうしたんですか？　こんなところで」

と、かけられた声は柔らかい少女の声。どうにか前を見ようとしたが、相手の足しか見えなかった。そこで、アカリは何か違和感を覚えたととりあえず返事することにした。

「神様の生贄になるんです」

返事をして、そしてアカリは違和感の正体に気がついた。まず相手は靴を履いてないのがひとつ。そして、その足が両方とも右足であるということ。

そう、どちらの足も右足なのだ。明らかに、人間ではない、妖怪か、それとも神様か。

「神様って、私の？」

アカリの予感には当たっていたようだ。今度こそもうお終いか。と、再び奥の茂みが揺れた。

「ちよつと、穰子……その神木は私のでもあるんだから私にもでしょう」

今度は、どうやら靴を履いているようでどちらの足がどうかはわからなかった。しかし神であることには違いないのだろう。

しかし、両名ともなんとというか、神々しさというものはあまり感じられなかった。

「それはそうかもしれないけど……私、人間とか食べないよ？　静葉姉さんは人間食べたっけ？」

と、ことはどうやらアカリの予想外の方に向かったようである。

「いや……食べないよ。ほら、生贄っていうのは信仰の証なんだよ。大事なのは命を捧げる覚悟とか、そういう信仰心なの」

そういうと静葉と呼ばれた少女が歩み寄り、そしてアカリを抱き起こした。

「そりゃまあ、生贄は信仰の証とっていいのかもしれないけど……」

…なんか誤解されてない？」

「そりゃ、私たち秋以外出番ないからさ……単純に、面識がないって言うか」

姉のほうが答え、そして妹とともに溜息をついた。

「とりあえず、こんな私たちを信仰してくれてありがとうね」

妹と姉が、二人でそれぞれ足と手の縄を解いてくれた。きつく縛られた跡が少しばかり熱を持ってじんじんと痛んだ。

「それで、生贄とかをしたってことは私たちに何か頼みことが……？」

穰子と呼ばれたほうの神様がアカリに尋ねた。

「そうなんです。実はこの雨をどうにかしていただきたくて……」

アカリは率直にそう答えた。本来の目的とは少々ずれているのだが、しかし目的を達成するにはこの雨がまずどうにかならなくてはならないのは明らかだ。

「ああ……これね。実は私たちもどうにかしなくちゃって思ってる」
穰子が少々困ったように言った。

「そう、そうなのよ。だって梅雨が終わらなければ、私たちの秋が来ないじゃないの！」

静葉がそう相槌を打った。気にするところはそこなのか。なんだか少しばかりずれているような気がしなくもない。

「ともかく、そうね……あなた、生贄なんだよね？」

アカリはぎくりとした。やっぱり殺されたりしてしまうのだろうか。「なら、私たちが好きに使ってもいいってことだよね？」

アカリは少々その言葉の意味を理解しかねた。つまり、労働的な意味なのか、信仰的な意味なのか、それともその他諸々なのか。

「……はい？」

とりあえずその意図を尋ねようと思ったのだが、アカリのその返事はどうやら肯定と取られてしまったようだ。

「よし、おけ！ それじゃ、私たちと一緒に異変解決しよう！」

穰子のほうが、アカリの右手をとった。あまりの突然さに、アカリ

は戸惑った。

「異変解決って……私、ただの人間ですよ？ そんな、私みたいなのがいたって足手まといになるだけです」

と、静葉が首を横に振った。

「信仰の力は偉大なのよ。私たちは私たちが信じてくれる人間が傍にいただけで強くなれる」

静葉はそう言ってアカリの左手をとる。

「そしてそれは貴女にも言える。私たちを信じてくれるなら、私たちの力を分けてあげられる」

二人に手を引かれ、アカリは一步、踏み出した。

「あの、それって」

アカリが、何かに思い当たったか口を開いた。

「私が、あなた達の巫女になるってことですよね？」

「うん、生贄になった時点で覚悟はあったでしょう？」

穰子が、逆に問い返した。

普通に考えて、こんな突拍子もないことになるなんて思わなかった。普通に考えたら思わない。そう、こんなことになるうだなんて誰が予測できたろうか。しかし、ここでまさかNOと答えるわけにもいかない。

「あ、はい。確認ですよ、確認」

アカリはそう言ってごまかした。

生贄の少女（後書き）

> i 9 3 8 4 — 9 1 3 <

アカリの立ち絵。ケータイシヤメなので画質乙なのはご愛嬌。
画力乙なのは、もっと精進します……

有頂天のお嬢様

雨で増水した川辺を歩く二人の神様と一人の新人巫女。そんな様子を、雲の上、遙か高みから眺め下ろすものがあつた。

「最近下界の様子が変だと思ったら、やっぱり異変なんだ……」

腰まで伸ばした流れるような蒼い髪が、天上を吹き抜ける風に美しく散ってきらめいた。風で飛びそうになったソフト帽のつばを手でおさえるその様は、一見すると品の良いお嬢様だった。

下界が雨でも、ここは雲の上。常にやわらかな日差しが降り注ぎ、美しい花が咲き乱れ……見渡す限り無限の平穏が広がっている。

その平穏を乱すものがあるとすれば、それは常に彼女だった。

「た〜い〜く〜つ！ もうこんな日々は飽きたわ……。また下界にでも遊びに行こうかしら。今度は異変を解決する側で」

思い立つなり、彼女は放り出してあつた剣を手にとった。紅く燃える刀身は物質とも非物質とも思える。緋想の剣という、天上界の宝物である……筈なのだが、今は彼女の私物と化しているようだ。

「総領嬢様」

背後から声をかけられ、蒼い髪の少女は振り返った。そこにいたのは、美しき緋色の衣を纏い、黒いソフト棒をかぶった女性であつた。「あら、衣玖。私は止めたつて聞かないわよ？」

少女はいたずらそうに微笑み、剣を構えて相手から問合いをあげた。「そんなことは分かつております。ですから」

衣玖と呼ばれた女性は呆れたような、しかし親しみのこもった顔で頷いた。そして不意に右手の人差し指を立て、天に向かって高く掲げた。すると、いかなる原理だろうか。雷雲もないのに遙か天空から一条の雷電が迸り、大気を震撼させた。

「私もあなた——比那名居 天子様のお目付け役という立場。できることならここで大人しくしていて頂きたいのですが」

天子と呼ばれた少女はそれでもなお、愉しそうであった。そう、よほど退屈なのであろう。特に死を延々と逃れ続けている天人にとって、死から逃れつつも永遠という時間をいかに消費するかというのは結構な難題なのである。

「衣玖。それは無理よ。退屈すると私は死んでしまうんだから」

言うが早い、彼女は地を蹴った。大気を切る音。残像がかすみ、そして次の瞬間には衣玖の目の前に迫っていた。そのままの勢いで剣を振り上げ、振り下ろす。天子の流れるような蒼髪が慣性を帯びて美しく舞い散った。

「なんのこれきし」

彼女の緋色の衣が、まるで意思を持っているかのように動き、そしてその攻撃を容易く受け止めた。衝撃波が、周囲に咲き乱れる白く可憐な花を散らし、舞い上げる。斬撃の直後にできる隙を見て、彼女は天子の腹を蹴上げようとした。

その刹那。花を蹴散らし、不意をついて天子の足元から何かが飛び出した。その何かが危ういところでその攻撃を受け止め、衣玖の足に衝撃を返す。

「っ！」

それは、小さな椅子ほどの要石だった。回転をかけ、顎を碎かんとして猛進してくる。衣玖はそれを蹴った勢いでそのまま後ろに飛び退った。0コンマ1秒未満の判断。直後、さっきまで彼女の頭があった辺りを、大気を巻き込みかき乱し、高速の要石が通過する。

衣玖はさらにそこから1歩飛び退いた。それとほぼ同時に、遥か頭上から大人の身長ほどもある巨大な要石が落下してきたのである。そのままそこに立っていれば、寸分違わぬ見事な狙撃だった。

衣玖を捕らえ損ねたそれは砂塵を巻き上げ、地面に突き立った。遅れて、衝撃が地面を伝わる。さすがにあれの直撃を受けていたら痛いでは済まなかっただろう。

「今度はこちらの番」

衣玖は手を翳して、電気の塊と思しき球体を発生させそれを投げ上

げた。電気の球体が岩の向こうに到達すると同時に、衣玖は地面を蹴り、そして岩を踏み台にしてさらに高く飛んだ。まずは自分が、電気球よりも早く相手に到達する予定だ。ふわふわと宙に舞う緋の衣を腕に巻きつけると、それは凶悪無比な破壊力を持つドリルへと変貌を遂げる。

衣玖はそのドリルを構え、天子に迫った。衣玖の後ろから迫りくる電気球の存在もあって、天子は飛び退る以外選択肢がなかった。その瞬間衣玖の衣がドリルから鈍器に姿を変えて天子のわき腹を襲う。巻かない分だけリーチの伸びたそれは、飛び退く相手を確実に捕らえた。

「うつ……ぐつ！」

衝撃のあまり、天子の思考が一瞬停止する。その一瞬に、後からやってきた電気球が追いつき、そして天子の腹に直撃して炸裂した。電気のスパークが派手に散り、そして筋肉の収斂のため天子はびくんと震えて数メートル後ろに吹き飛んだ。

「つ……ああああ！ らめえええ！」

奇妙な悲鳴を上げ、天子は四肢を痙攣させる。

要石による反撃を回避するために衣玖は追撃をせずにその場を飛び退った。だが、その配慮はどうやら不用だったようだ。

「やってくれるじゃないの！」

天子はどこから取り出したのか、要石を宙に浮かべ、そしてそこから無数のレーザーを放った。衣玖は飛び退いた直後というだけあって、次の回避行動を行う時間はない。

「しまつ……」

あわてて体を捻ろうとした時にはもう遅かった。高熱を帯びた衝撃が全身を貫く。一瞬意識を手放し、彼女は地に倒れ込む。

「そこだあああつ！」

花を盛大に散らし、大気を裂き、天子が緋想の剣を構えて猛進する。そして数メートルのところで飛び上がり、相手を全体重をかけて串刺しにする形で着地をした。素人目にも見えるのどの衝撃波が幾重

にも発生し、花びらや葉が幾つにも裂かれて舞い上がった。

しかし、手ごたえはない。それもそのはず。危ないところで意識を取り戻した衣玖は地面に手をつき、そしてそこから跳ね起きて間合いを取ったのである。

天子もそこまで予想していたか、即座に左から右へ剣を振りぬき追撃にかかる。衣玖は腕を引き第一撃をやり過ぎすと、二撃目を衣で受け止めそして指先から小さな電撃を放ち反撃する。

天子はそれを難なく緋想の剣で受け流し、続く二撃を交わして間を開けた。互いに、一步飛び込めば武器が相手を捕らえる距離だ。しかし、互いに弾幕攻撃がある今は相手の出方を伺う時間がない。先に動いたのは、衣玖だった。先ほどのレーザー攻撃を恐れて、牽制か、畳み掛けに来るつもりだな、と天子は悟った。牽制なら、剣で受けて反撃にかかる……畳み掛けならば剣では受けられないだろう。とすれば、交わすことで大振りな動きを捉えるか。

一瞬で、それだけの量を天子は考え、相手の動きを読む。しかし、ひらひらと漂う相手の武器はドリルになるのか、鈍器になるのか、それとも弾幕を繰り出すのかを読み取ることができない。

これは賭けだ、天子は内心そう思った。牽制の弾幕や袖では、こちらが避けても対応が早い。避ける際に作った隙をつかれては……。そう考えている間にも、衣玖は距離をつめ、そして今にも羽衣を腕に巻きつける所であった。結論が出た場所が、あまりにもぎりぎりだった。いや、衣玖はそのポイントきっかりを狙ったのだろう。相手の判断が最も難しい時点で繰り出されたドリル。天子は上体を捻って重心をずらし、そしてそれを紙一重で回避した。高速で回転をするドリルが天子の服の腹の辺りを掠め、破った。

「あつ……私の服！」

天子は別にそのぐらいで怒ったわけでもないだろうが、しかし少々本気になったようである。緋想の剣を彼女が地面に突き立てると、地面のあちらこちらに亀裂が走り、そして巨大な石柱が目にも留まらぬ高速で飛び出した。それは、衣玖の足元からも同様に飛び出し、

彼女に強烈なヒットを与えて空中高く放り上げた。空中において姿勢制御のできる衣玖も、石柱の直撃を受けては体勢の維持すらままならない。

「うつ……これは」

的だ。非常にマズイ。そう思ったその刹那。衣玖の脇腹を、回転をかけて飛んできた要石が直撃した。

「……………！！」

痛みに悲鳴を上げようにも、脇腹を突き上げられては声すら出せなかった。臓腑が衝かれ、そしてよじられるような力がかかる。衣玖は一応妖怪である。それが故に致命傷にはならないが、普通の人間ならこれは即死しかねない。

そのまま頭から落下して行く衣玖。どうやら気絶してしまったようだ。天子は彼女の落下地点を見定め、そこに向かって走った。途中で、緋想の剣も放り投げ、彼女は先ほど戦闘で出した速度よりもはるかに早く走った。

そして落ちてきた衣玖をはっしと抱き止めた。どこまでも青い空の下。天上に咲く真っ白な花が可憐に舞い散り二人を包む。

「総領娘様……………」

姫抱きされた衣玖は薄目を開けて天子を見上げた。悔しさと、天子の先行きを心配する気持ちの入り混じった眼差しであった。

「衣玖、あなたは精一杯戦ったわ。結果私を止められなかった、それだけよ」

言う事はきついが、しかしそう言う天子の目は優しくかった。

「これで、別に私がどんな問題を起こしたとしても、貴女の責任にはならない」

天子はそう言っただけで衣玖をそっと、花咲き乱れる天上の地に寝かせた。「どうか……………どうかお気をつけて」

彼女はそれでも心配だったかそう答えた。いや、答えにすらなっていないかったが彼女が最も伝えなくてはならなかったことは言ったのだろう。伝わったかどうかについては、少々どころではない疑問が

残るが。

「それじゃ、いつてくるね」

天子はそう言つて身を翻した。

「あ、そうだ！ 異変解決して帰ってきたら新しい服買つて頂戴！

たぶんこれ、ぼろぼろになつちやうから」

衣玖の杞憂はどうやら晴れなさそうである。

と、ぐったり伸びている衣玖を尻目に、天子は地上に降りるべく雲の階段を下りていった。

有頂天のお嬢様（後書き）

> i 9 4 1 5 — 9 1 3 <

比那名居さん始動です。挿絵はやたら要石が刺さってますが、これは文を書く前に絵を書いたからですな

妖怪の山

そしてこちらは例の神様二人と新米巫女。

「ここらを超危険なカラスがうろついているから、今すぐ引き返せですって?」

穰子が、それはできない、とばかりに大声で聞き返した。

「そうなんです。核融合センターから逃げ出してしましまして……」
答えたのは、河童であった。緑色の帽子を被り、ポケットを多数有する服をまとっている。おそらくあれは多くの工具を収納し持ち歩くためのなのであろう。

「カラスがなによ……私、これでも神様なのよ?」
穰子が納得がいかなさそうに呟いた。

「カラスとは言っても、核融合を司るものですから……危険極まりなくて。その気になれば妖怪の山だって簡単に焼け野原にできる力の持ち主なんです」

河童も、どうやら本気で困り果てているらしい。確かにそんなものが逃げ出せば責任問題だ。もっとも、物理的には焼け野原にできて、この幻想郷には鬼巫女やら普通の魔法使いやら、天狗やらがいるのだからそう簡単にはいかないだろう。

「とりあえず、私たちは私たちの責任でどうにかするわ。どんな目にあってもあなたたち河童のせいにはしないから」

静葉が優しく言った。姉の貫禄というか、そういった類のオーラが出ている。

「うーん、でもあなた達はいいけど、その後ろにいるのは人間だよね……?」

言われて、アカリはびくりと肩をすくめた。ここは妖怪の山から流れる川、つまり妖怪の領域なのだ。里では人を襲うことのない妖怪も、ここではどうだかわからない。

「そう、私たちを信仰してくれてる巫女なの」

穰子が自慢げにそう答えた。

「あら、穰子さんも巫女を持つようになったんですか？」

河童が目を丸くして尋ねた。

「そう、生贄にささげられてたから、私たちの好きにしていいいよね、
ってことで」

「ああ、なるほどそういうこと……」

河童は納得顔でうなづいた。進んで、あの二人の巫女になろうとする人はまずいないだろう。祭事といえば秋ぐらいしかないのだから、仕事として食べてはいけないのだ。

「で、私は盟友である人間がそんな危険なところにホイホイ入っていくのを黙ってみているわけにはいかないわけよ」

河童は、背中に背負ったリュックサックのようなものから何らかの機械を取り出した。見た目からして、何かの制御装置と思われる。

「ちよつとあなたを試してみたい」

アカリは、その言葉の意味を瞬時に理解した。河童の背負っているそれから、機械でできた手が数本伸びてきたのだ。

「アカリちゃん、いける？」

静葉が聞いた。

「はい、先ほど貸して頂いた武器がありますから」

アカリはそう言って二人の前に出た。

「あれはあげたようなものだよ。私への信仰が失われない限り、ずっとあなたの下にあるから」

静葉はそういつて笑った。神様の力は信仰の力。その力を信者に貸すことは、信者自身の信仰を力や形として返しただけ、とも言えるのだ。

「私は河童の川城にとり。あなたは？」

河童はまず礼儀正しく名乗り、そして次に相手の名を聞いた。

「私はアカリ。名乗るほどの姓はありませんが、村での屋号は柳田です」

アカリが名乗ると、にとりは二人の神様に、危険なので下がってい

るように言った。

「大丈夫、死なせはしません」

と、そう付け加える。死なない保障はされたが、つまりそれは大怪我程度ならありうるということか。危険なので、といって二人を下がらせたことを考えても、あり得る事である。

「死にませんか」

アカリはそう言うてにとりから間合いを取った。力を得る前の彼女なら、この程度の動きでも数秒かかっていただろうが、今は軽く地面を蹴って後ろに飛び退るだけで十分だった。

「じゃ、はじめ！」

先に動いたのは、当然にとりのほう。もつとも、動いたのは彼女ではなく、彼女の使っている機械のほうだった。

背中から伸びている機会のアームが、さらに数倍の長さになってアカリに迫る。

「やっぱり、そういう系ね」

アカリは手ぶらのまま、そのアームのない場所を見つけて飛び込んだ。同時にそれを読んだかのように、アーム軌道が交差し、道を塞ぐ。

アカリは地面を蹴ってそれを飛び越えた。先ほどまで、何のこともないただの人間だったとは思えない。

「……これはすごい」

アカリ自身がどうやらそれに感動したようだが、のんびりしている暇はない。そのまま真横に飛びのくと、直後にその場所を機械の腕が殴りつけた。外れたアームは岩にぶつかり、そしてひびを入れた。「リーチ圏内……！ 変われっ」

アカリは呟き、そして腕を突き出す。すると、その手の中に光が迸り、次の瞬間。彼女の手の中には、一振りの剣があった。剣先から柄にかけての、黄色から赤への燃えるようなグラデーション。その刀身はまさに山の紅葉それそのものを体現していた。

しかし距離は僅かに足りず、両刃のそれは相手を貫くまでには至

らなかった。

「うわ、実は結構物騒なもの持ってるんだ……」

にとりは慌てて身を引いた。もちろん、ただ身を引いたわけではない。

アカリの背後、すでに伸びきったアームが今度は縮んでいく。そのついでに、アカリを数ヒットしようという算段だ。

「しまっ……」

アカリはどうか剣を構えてそのうち数本を切りつけた。ぱつ！と、紅の血が散ったように見えた。しかし、切ったのは機械の手。血液があるとは考えがたい。

しかし、その散りようから、遠目から見てもそれが何であつたかすぐに理解ができた。切られた部分が、桜の葉となつて舞い散つたのだ。

「っ……これが信仰の力かつ」

にとりは鋼のアームが断ち切られるとは思っていなかったようだ。一瞬の思考停止。その瞬間に、アカリが距離を詰めていた。防御に出るアームを断ち切り、紅葉の剣を彼女の首に突きつける。

「その剣は、魔力や妖力を帯びてる金属とかは無理だけど、それ以外なら大体なんでも桜の葉に変えてしまうの」

静葉が自慢げに言った。

「魔力や妖力を帯びた金属って、武器や盾には結構多いんじゃない？」
にとりが言った。

「い、いいのよ。相手を切れれば刃物として成立よ」

静葉は痛いところをつかれたか、そう言つてどうにかごまかした。

「うう、今度から作る機械は一応全部妖力入りにしよう……。とりあえず、あなたの實力はわかつたよ、剣をおろして」

にとりはアームを全て格納しアカリに言った。

「戻れ」

アカリが言つと、剣は一枚の桜の葉になり、そしてアカリの服の胸元にぴたりとくっついた。

と、同時に、張り詰めていた緊張の糸が解けたかアカリはその場
にがくりとひざを着いた。安堵のため息がおもわず口からこぼれ出
た。

「なるほど……それが姿を変えてたんだ……」

にとりは感心したようにそれをまじまじと見つめた。

「その椀はね、べつになんら特別なものじゃないの。彼女には椀の
葉を剣に変化させる能力があるのよ」

静葉が説明をする。

「椀だけって、かなりピンポイントですね……」

にとりはまた、突っ込んだ。

「うーん、それは仕方がないじゃない。実際椀が一枚あれば武器に
できるんだから、きつと問題はないわ」

静葉はなんとか弁明をした。実際のところ、剣と、秀でた運動能力
さえあれば後はどうにかなるだろう。まさしく、どこぞの庭師がそ
れであろう。

「心配だ……やっぱり人間はちょっと頼りない……いや、でも神様
が二人もついてるみたいだし……」

にとりはなにやら、アカリの心配をしてくれているようである。確
かに、ちよつと身体能力が上がっただけで、まだ戦い慣れぬ少女で
あることになんら変わりはない。

「まあ、大丈夫かな」

楽観的な彼女の結論は、どうやらそこに至ったようであった。

「んじゃ、通してもらうわ。雨雲の中心に向かうには、この山の頂
上に向かうのが一番早いから」

穰子が、アカリの手を引いてにとりの脇を通り抜ける。

「くれぐれもお気をつけて」

にとりはそう言って、ふつと消えてしまった。いや、まだどこかに
いるのだろうが、光学迷彩だかなんだかで見えなくなっているのだ
ろう。

「どうもありがとう」

静葉がそう言つて、同じくその脇を通り抜けた。

かくして、一向は妖怪の山を山頂に向けて進み始めた。遠く長い道のりを、少しずつ。

同刻、妖怪の山、頂上。

そのカラスは疲れ切っていた。雨の中、水分を吸つてずっしり重くなった羽を折りたたみ山頂に降り立つ。羽をたたんでしまえば、その出で立ち黒髪の少女であった。少しばかり顔立ちの整った綺麗な、しかしどこにでもいそうな少女。違うことといえば、胸に埋め込まれている真つ赤な瞳と右腕に装備した八角柱の棒であった。

しかし、そこに先客がいたことに、その少女は気がついた。傘を差し、岩の上で雨の降りしきる灰色の空を見上げている。髪の色は緑と、あまり見かけない色であった。服も、青みがかつた緑で、スカートまで統一されている。

「おや、来客かな？」

その声は、まだ幼いながらに、しっかりしていた。

「せっかくこんなところまで来てくれたんだから、とりあえずかけて」

振り向いた少女の顔、その顔を見てカラスはまた驚いた。片目はサファイアのような透き通る蒼でありながら、もう片方の目は血の池のように真つ赤であった。

しかし、ここは幻想郷。そのような者がいたとしてもおかしくない。カラスはそう考え、とりあえず少女の空けてくれた岩の上に座った。傘のおかげでその岩はほとんどぬれていなかった。

「ここ、この山で一番高いところなんだよね」

カラスの少女が口を開いた。

「……そうだね」

傘をさした少女が答えた。紫色の、少し古風な傘であった。

「ここから見下ろせば、幻想郷が一望できると思っただけだなあ

……」

カラスの少女は残念そうに言った。ここはほぼ雲の直下位置する場所。霧に視界がさえぎられて、10メートル先も見通すことができない。

「視界を奪ってしまったてごめんよ」

傘の少女が、そう答えた。

「え、この雨、あなたが降らせてるの？」

カラスは驚いて聞き返した。

「そうだね、でもこの雨を止めるわけにはいかないんだ」

「どうして？」

そう聞かれ、傘の少女はてを捻ってかさをくるくると回してみせた。するとどうだろう、その傘には。

「あつ……目と舌！ 一本多々良だ！」

恨めしそうに見開かれた目、そしてだらりと伸びた舌。

一本多々良……つまりは、傘の付喪神が、捨てられた恨みで妖怪になったものだ。

「この雨が止んだ時。私と同じような思いをする傘がいたいどれほど増えるでしょう」

悲しげに、少女は言った。

「人間も妖怪も、使わなくなったものなんてすぐに捨ててしまうから。また買えばいい、ってね」

そんな少女の言葉に、カラスは思うところがあった。

「私も、もしかしたら捨てられちゃうのかな」

ぼそと、そうつぶやいたのである。

「なんだい、お姉さんは妖怪の道具なのかい？」

傘の少女は、その呟きを逃さなかった。

「そうだね、毎日核融合炉で使われる日々。そんなのに疲れて、ここまで来たんだけどさ……。わたしも、そのうち核融合ができなくなったら処分されちゃうんじゃないかな、ってね」

うつむき気味に、カラスは答えた。雨が、彼女の髪から滴り落ち、

頬を伝う。

「そうだね、人間も妖怪も身勝手なものだから。必要がなくなれば容赦なく捨てると思うよ」

傘の少女の口元が緩んだ。このカラス、こっち側の「物」だと。

「ねえ、帰りたくなんてないよね」

傘の少女はそう言ってカラスの少女に手を差し伸べた。

「私は多々良 小傘。あなたは？」

カラスの少女が、はじめ戸惑い気味に、そして思い切ったようにその手をとった。

「私は霊鳥路 空」

雨が、二人を包み込み静かに降りしきる。その雨の中一つの傘の内側で、手を取り合う二人。

にび色の雲、深く垂れ込めた空がどこまでも、どこまでも広がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6510m/>

東方涙梅雨

2010年10月10日11時58分発行